わたしの「女ひと」

益池成和

室生犀星に「女ひと」という作品がある。随筆集である。わたしのごく初期の読書体験の一冊である。ただし読了はしていない。

わたしは現在六十八歳である。当たり前だが、あと二年経つと七十ということになる。生きていれば、という但し書きを付けねばならないかも知れないが（何人かの顔見知りがいなくなっているし、すでに祖父母の年齢を越えてしまっている）、己が齢のことを考えてみると唖然とならざるを得ない。

「女ひと」を手にしたのは、記憶に齟齬がなければ、中学生の時のことかと思われる。二年生あたりだったと思うが、この時期わたしはそれこそむさぼるように本に親しみ始めた。とりわけ恋愛小説を。おそらく「女ひと」も恋愛ものと思い込み買い求めた一冊に違いない。たしかに女性への言及はあるにはあるが、読み始めてみると、いっこうに男女が交わらない。思いを伝えることもなければ抱き合うこともない。。当たり前である。小説ではなく随筆であって、基本犀星の女性への見方を述べたものに過ぎない。

女性というものが知りたかった。そしてその女性を対象とする恋愛なるものがいかなものか、とにかく探ってみたかった。今にして思えば、それはわたしの初めての渇望であった。

人に一目惚れという不思議な現象がある。わたしは三度この体験をもつが、その一番最初の出来事が、中学校の入学式の日に起こった。式が終わり体育館からその他大勢の新入

生とぞろぞろと出てきたとき、ひとりの健康そうな女の子のまるい頬が眼に飛びこんできた。その子はわたしと目が合い、微笑んでいた、気がする。

当時わたしの育った街には、小学校も中学も一校ずつしかなかった。小学校にいた仲間が、そのまま中学でも机を並べるということがほとんどだったが、微笑んだはずの彼女はわたしが初めて目にする女の子だった。なぜだか分からない。わたしはその日から在学の三年間、その子をひたすら思い続けることになる。たぶんこのような出来事に理由などないのだろう。

記憶に間違いがなければ、卒業の年だけクラスが一緒になったはずである。だからといって、その一年間親しく近づき話が出来たわけでもない。とにかく異性に臆病な男だったから、ひたすら教室の隅から、目立たぬように彼女の姿を追っていた。放課後のクラブもわたしが卓球部で相手はテニス部。こちらは教室の中で彼女は屋外である。すれ違うことさえなかった。

考えてみると在学の三年間、彼女とまともに口をきくという事はほぼなかった。唯一面と向かって言葉を交わしたのが、彼女への告白の時だった。三年生だったろうか。おそらくは夏休み明けだったと思う。誰と行ったかは覚えていないが(ひとりで行った気もする)、布施のデパートだったはず。鉛色のハート型のペンダントを買い求め、その中に自身の顔写真を切り抜いて忍ばせたものを持参した。まともに異性と立ち話も出来ない男が、よくも思い続ける人に声をかけ、机に座らせ、手渡しできたものである。付き合ってほしいと勇気を振り絞って口にしたはずである。拒絶されたわけではなかった。が、受け入れの言葉が返ってくることもむろんなかった。彼女はただひたすら微笑んでいた記憶だけが残っ

ている。

卒業後の彼女の消息をわたしは知らない。どこの高校に進みどこの大学に行ったのか、あるいは就職したのかも何も知らない。

思わぬ形で彼女と顔を合わすことができたのは、卒業してから三十数年後、五十を目の前にしてのことであった。

わたしは先天性股関節脱臼という病気を持って生まれてきた。いつまで経ってもよちよち歩きもしないことに気が付いて、両親が病院に連れて行ってくれて、脱臼したままの両足を骨盤にはめ込んでもらった。ところが小学五年の体育祭の日に亜脱臼を起こす。二日ほど足がひどく痛んだ覚えがある。運悪く体育祭の次の日は振り替え休日になっていて、翌日には嘘のように激痛は消えていた。歩く様子が変だということで整形外科にかかったのが中学に上がってからのことで、治療するには手遅れだった。

四十二歳になった頃から歩くことに苦痛を伴うようになった。五十メートルほどの歩行が、脂汗ものになってしまったのである。病院にかかると、まだ若いが左股関節の人工骨置き換え手術を勧められた。早々に手術を選択し四ヶ月ほどの長期入院を経験した。入院中、偶然小中学の同級生の男と知り合うことになった。彼は前々からその国立病院の看護師だった。配置換えで整形病棟に移ってきたのである。退院後彼の誘いもあって、地元の同級生がよく集まるという喫茶店兼スナックに顔を出すようになった。店通いが半年ほどもたった頃、改めて顔見知りになった同級の集まりを主導する男から、同学年だった女子が奈良の當麻寺近くでたこ焼き屋を始めたから行ってみないかと誘われた。驚いたことに

そこはわたしが初めての一目惚れをした人の店だった。

休日に同級の飲み友達五人で行った。わたしはひとりで緊張していた。何しろ十五歳だった卒業式以来である。万が一ひどく彼女が面変わりでもしていれば、と考えると会いたいような会いたくないような気持ちがあった。

そのような危惧はその姿を目にした途端、安心と安堵にすり替わった。彼女は美しかった。中学の入学式に出会った女の子がそのままの姿で、優しげに微笑んでいた。そばに中学生だという彼女の次女が立っていた。母親にそっくりだった。

何故か無性に嬉しかった。彼女のそれまでの人生が幸せであったに違いないと思った。半時間ほどしてから丸顔のひどく話し好きの旦那も現れた。

中学の告白の時以来、二人だけで話をするという事が出来たのは、その再会の何年後だったろうか。

その当時わたしの小中学の同級生は、三年に一度のペースで全校同窓会を行っていた。（全校といっても四クラスで、卒業生は百六十人ほどだったが）おそらくは二年後ぐらいだった気もする。

わたしはクラス単位ではなく、全校同窓会が初めて行われた三十六歳の集まりから欠かさず顔を出していた。が、初恋の人と顔を合わせた記憶がない。もしかすると彼女にとって、その年が初めての同窓会参加だったかも知れない。一通りの挨拶やイベントが落ち着いてから、入院で世話になった看護師が、わたしを彼女の席に連れて行った。退院後、彼はしばしば私のたばこ店に現れるようになり、時に小中学の時誰が好きだったなどという

話が出たりしていたのである。

目の前の席に腰を下ろしても、彼女はただ微笑んだままで、戸惑いも何もないように見えた。わたしの気持ちを彼がにやけ顔で代弁しても、ゆるやかな表情に変化はなかった。

あの日一体何を話したのだろう。おそらくは互いの店のことなど喋り合ったに違いない。たばこを扱ってみては、などと口にした記憶もある。ただそれだけで、告白した時の思い出も、わたしの淡い感情も、たとえ冗談混じりでもついには口にする事もなく、どうでもいいような話題に終始した。

彼女のたこ焼き屋さんはわずか数年で店を閉じた。驚いたことに、いかにも人の良さそうな彼女の夫が、市議会議員に当選した。おそらくはそのような事情もあったに違いない。同窓の旗振り係の男に言わせれば（彼は若い頃から、結構選挙応援に駆り出されていた）、たとえ小さな街の議員でもなかなか大変で、ことにその連れ合いは普段から気遣いを強いられ、選挙ではその妻の評判が案外に大切なのだという。

わたし達の同窓生は毎年会はなくとも、春はタケノコ狩り、秋はミカン狩りなどというふうに頻繁に集まっていた。春秋の季節のイベントとは別に、年が改まる時期には今年は忘年会だ、いや新年会の方がいい、などともやっていた。わたしは旗振り係の男と親しくなったせいで、大抵の集まりには欠かさず顔を出していたが、先の同窓会以降、彼女と出会うことはなかった。子育ては落ち着いたはずだが、政治家の妻として多忙だったのだろう。

ところが五十なかば過ぎたあたりから、その彼女が少しずつ集まりに顔を見せてくれるようになった。たこ焼き店は閉じたが、家で作付けした米や野菜（嫁ぎ先は農家だった）、

あるいは近隣農家が持ち込む作物を、店舗跡で販売を続けていたらしい。同級生の旗振り係も定期的に訪れて、主に米を求めていたようだ。そのようなこともあって、彼女の参加が増えていったに違いない。

かつて憧れ続けた人が同じ集まりのなかにいてくれる。そのことはわたしの密かな喜びとなった。もはや十代の中学生ではない。むろん彼女の思いは分からないけれど、勇気を奮って話しかけたとしても、快く応じてくれたはずである。だが、わたしはただの一度もそうはしなかった。出来なかったのかも知れない。たとえ出来たとしても、あえてしなかった気もする。むろん彼女も話しかけてくることはなかった。

そんな付き合いが六十五歳の日まで続いた。

奇妙なコロナ騒動が猛威を振るう直前の二月、今年は新年会だとなって、東大阪の石切劔箭神社に参詣したあと、近くの観光ホテルで二十人ほどで同窓仲間が集まった。結局は飲み会なのだが彼女も顔を出していた。

その日から三ヶ月ほど経ったあと、わたしの店を訪れた旗振り男が、小一時間ほどのいつもの会話のあと、腰を浮かせながら、珍しく彼女のことを話題にした。ここ最近彼女は腰痛に苦しめられていたという。あまりの身体のきつさに地元の病院で検査をしたところ、小さな臓器の悪性腫瘍が発見された。直ちに大阪の癌専門病院に移され治療を受けていると言った。

それまでも彼は月に一、二度のペースで私の店に立ち寄り、何事か喋って帰るのが常だったが、彼女のことを話題にしたあとも、その行動に変わりはなかった。彼の顔を見る度にわたしは彼女の現況を尋ねてみたかった。だが、いつも聞きそびれた。

二ヶ月ほども過ぎた頃だったか、いつものように店に現れた彼が帰り際、どうも思わしくないらしいとぽつりと口にした。彼は顔が広く地元に暮らす彼女の兄とも親しく、その兄が妹のことを誰にも言ってくれるな、と口止めしたという。

彼女の訃報を聞いたのは秋も深まった十一月末のことだった。旗振り係の男の車で奈良の斎場に向かった。彼の考えで少し遅れて着いたが、それでも弔問客は多かった。集まった同級生全員の焼香が済んだあと、親族との一通りの挨拶を済ましてから、皆で近くのファミリーレストランに立ち寄った。入店後三十分ほどしてから彼女の夫がひとりで追いかけてきた。

夫は旗振り係に二枚の紙幣を手渡しながら、同級生の人達には生前妻が色々と世話になったから、この場の足しにしてほしい、これは彼女の意思だろうから、といった。そして見送った人の最後の思い出を喋った。わたしは隣のテーブルで黙ったまま聞いていた。

その話によると、はなから発見が遅かったのか、様々な治療が試みられたが結局どれも効果がみられず、その半年あまり、家族は衰弱していく彼女を無言で見守るしかない日々だったという。夏場を過ぎた頃に主治医から最後の提案という形で話があった。最新の治療方法だったのだろうが、どうにか試みれば、もしかすると治癒できるかも知れないと。

彼女は首を縦に振らなかった。もうこれ以上の苦痛に耐えられないと言って。夫や二人の娘たちは生きていてほしいと懸命に訴えた。が、彼女は家族に涙ながらに謝りながら、受け入れることは決してなかったという。

人に記憶というものがある。わたしの中にその機能が保持され続ける限り、二十三年前

に死んだ父親も、三年前に見送った母も、たとえその存在は消滅していても、彼らはたしかに居続けている。記憶のなかでは、怒鳴られたり小言をまくし立てられたことはすっかり薄められていて、何故か二人の笑顔ばかりが残っているけれども。

初めての一目惚れをわたしに教えてくれた彼女も、両親ほどの近さはないに違いないだろうが、ふと目を向ければ、出会った日に見た健康的な笑顔のまま、佇んでいてくれている気がする。